

## 第13回「中村元東方学術賞」授賞理由

受賞者 田村 晃祐

東洋大学名誉教授

第13回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員長 前田専學（東方研究会常務理事）

2003年10月10日インド大使館

田村晃祐博士は、昭和六年のお生まれですが、昭和二九年四月に東京大学大学院人文科学研究科修士課程にご入学以来、日本仏教の研究を志され、その研究の焦点を日本における天台宗の開祖最澄に合わせてこられました。

そのために博士には、最澄に関してお書きになった書物や論文が多数ございます。例えば『最澄・空海』（〔日本の名著〕共著、中央公論社、昭和五二年）、『最澄辞典』（東京堂、昭和五四年）、『最澄のことば』（雄山閣、昭和六〇年）、『日本の仏典 最澄—山家学生式・顕戒論—』（筑摩書房、昭和六二年）を挙げることが出来ます。しかし博士の長年の最澄研究は、博士が東京大学へ提出されました博士請求論文『最澄教学の研究』（春秋社、平成元年）として見事に結実致しました。

博士は、まず戒律の研究を行われ、その戒律の本質が最澄の教学にあることを明らかにされました。さらにいわゆる「三一権実論争」として有名な最澄と法相宗の徳一との間で、数年にわたって、天台教学と法相教学、および一乗思想と三乗思想の真実性をめぐって展開された論争を詳細・綿密に研究されました。この論争には、古来からの注釈も本格的な研究もないために、論争の経過を追うことすらも困難を極めました。博士独自の方法を駆使して、ほぼ論争の経過の全容を解明され、それによって最澄独自の思想を鮮明にすることに成功されました。

この研究によって、最澄の教学の特徴は、①南都の仏法は因分（悟りへ至るための学問・修行）の法であるのに対して、天台は果分（悟った仏）の法であること、②従って戒律で言うと、南都の戒律のように一旦小乗戒を受けてから大乘戒を受けるのではなく、最初から悟った仏の法（果分の法）である大乘戒をうけるべきであるという点にあることが明らかにされました。

このような検討から、博士は、悟った仏の法（果分の法）への直入という最澄の思想は、鎌倉仏教諸宗派の教理的特色に生かされており、日本仏教の教理的

徴は最澄によって形成されたと観ることが出来る、と結論づけておられます。この見地からすれば、日本仏教史上、平安仏教から鎌倉仏教への重要な展開は、行の思想の展開であったと見る事が出来ると主張されております。

博士は、以上のように、徳一との論争から、最澄に新しい照明をあてて、最澄研究に画期的な貢献を果たされ、昭和四六年には日本印度学仏教学会賞を、平成八年には日本印度学仏教学会鈴木学術財団特別賞を受賞されました。

博士の、日本仏教へのご貢献は、最澄研究ばかりではありません。財団法人聖徳太子奉賛会の評議員・幹事を務められ、博士の聖徳太子への並々ならぬご関心は、『聖徳太子』（〔日本の名著〕共著、中央公論社、昭和四五年）として実り、また「聖徳太子と菩薩思想」（『菩薩思想』西義雄博士頌寿記念論集刊行会編、大東出版社、昭和五六年）、「三経義疏撰述の問題」（平川彰編『仏教研究の諸問題』山喜房仏書林、昭和六二年）などの論文としても結実致しました。さらにまた現在、東方学院講師として、「聖徳太子」を講義しておられます。

また親鸞に関しましても「親鸞聖人とその友」（『親鸞と現代』第三集、『仏教文化講座』築地本願寺、平成元年）、「親鸞の一乗思想」（『日本仏教学会年報』四二号、昭和五二年）、「法然と親鸞—悪人正機説をめぐって—」（『東洋の思想と宗教』一五、平成一〇年）などを発表され、さらに最近は視野を広げて近代仏教にも関心をお持ちになり、その研究成果を「井上円了と真宗」（『井上円了研究』六、昭和六一年）、「明治の仏教界」（『東洋大学アジア・アフリカ研究所研究年報』三三、平成一一年）「井上円了と村上專精」（『印度学仏教学研究』四九卷二号、平成一三年）として発表しておられます。

以上のように、近代仏教学の立場からの最澄を中心とした日本仏教の長年におたご研究の成果は、まことに輝かしいものがあり、日本仏教研究に新生面をひらかれたご功績は、中村元東方学術賞にまことに相応しいものと判断され、今回の授賞となった次第であります。